



3月の気温が低く今年は桜の開花が遅かったのに、4月になると突然夏日になったりして、気候変動のせいか季節感が失われていくように感じる。そんな中で、今年も4月12日(土)、13日(日)にアースデイ東京が代々木で開催され、協同総研もワーカーズコープビレッジの一員として参加した。今年は天候にも恵まれ、おかげさまで『協同ではたらくガイドブック』も4冊ほど売れた。このイベントは、地球環境問題を楽しみながらも真面目に考えることが大きな目的であり、多様な人たちの参加により成り立っている。本来ならワーカーズコープビレッジの報告を述べるべきかもしれないが、別の機会に譲ることにする。

今年のアースデイで私が注目したのは、パレスチナのガザ市民が直面している厳しい状況に向き合い、日本から支援を届け、メッセージを発している人びとの姿だ。戦争の問題は地球環境問題とは直接関係がないと思われがちだが、戦争は最大の環境破壊という言葉もあるように、平和こそ持続可能性の大前提である。

私が賛助会員をしているNGO*1が今年もアースデイに出店していたので、ブースを訪ねて話を伺った。日本からの寄附金を資金として、長年ガザ地区で子どもや女性、障害者など社会的に弱い立場にある人たちの支援を続けている団体だが、現在はガザ緊急支援として、生活必需品の配布や炊き

出しなどを行っている。もちろん日本人スタッフは入国できないので、今回のようなイベントで支援グッズを販売して資金をつくり、支援物資を送り届け、パレスチナ人スタッフが現地で支援活動を行う。また、オンラインで現地の状況を伝える報告会なども開催している。

ミニステージでは、「パレスチナ・ガザの現実から平和を考える」というテーマで、白川優子(国境なき医師団看護師)、島昭宏(ロック弁護士)、いとうせいこう(作家・ラッパー)によるトークイベントが行われた。せいこうさんは、メインステージのライブにもダブ・ポエットとして出演し、レゲエのリズムに乗せて、ガザで起こっているジェノサイドを批判する詩を朗読した。「もし、いまガザで起こっていることを許してしまうなら、『こんなことは許されない』という人間社会の基準が壊れてしまう」という言葉が重く響いた。



*1 認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン<https://ccp-ngo.jp/>